

生成AIによるコンサル業務プロセスの変革と一般企業への応用

はじめに: コンサル業界を襲う「DeepResearch×RAG」の波

近年、ChatGPTなどの生成AIサービスに**DeepResearch**機能が搭載され、誰もが簡単に「情報収集・分析・レポート作成」を行える時代が到来しました^①。深い市場リサーチを武器としてきたコンサル業界では、この波により「コンサル不要論」さえ囁かれ、調査・仮説立案・提案資料作成といった業務プロセスが静かに再定義されつつあります^①。一部の先進的なコンサルティングファームは既に生成AIを業務に取り入れ、生産性と付加価値の向上を図っています。

本レポートでは、コンサル業界における生成AI（特に**DeepResearch機能**と**RAG (Retrieval Augmented Generation)**の組合せ）の活用事例をもとに、調査、仮説立案、提案、レポート作成、プレゼンといった業務プロセスごとの**Before→Afterの変化**を整理します。また、その変革がコンサル業界にとどまらず一般企業の業務にも応用可能である点に焦点を当て、導入のステップや必要な技術・体制、導入効果、そして人材の役割変化について詳述します。^②

調査・情報収集プロセス – AI導入「前」と「後」

- ・**Before (従来の調査)** : アナリストがインターネットや業界レポートを使って手作業で情報収集し、資料を読み込み要点をまとめていました。市場調査や競合分析には数日～数週間を要し、言語の壁もあって英語や中国語の情報は十分カバーできない場合もありました。また、集めた情報を報告書にまとめるまで多大な工数がかかり、限られた範囲の知見しか得られないこともしばしばでした。
- ・**After (DeepResearch×RAG活用後)** : 生成AIエージェントが数分で世界中の情報源をクロール・統合し、レポートを自動生成します。例えばChatGPTのDeepResearch機能では、英語・中国語など多言語の最新ニュースや公開データを瞬時に収集・分析でき、従来数日かかった市場調査が**わずか数分で完了する高速化**が実現しました^③。AIが言語の壁を超えてグローバルの情報ソースを横断的に統合するため、調査範囲と深度も飛躍的に拡大します^④。その結果、「情報を集めて要約する」作業自体の価値は相対的に下がり、**人間の付加価値はその先の洞察の応用力や戦略提案力にシフト**しています^⑤。DeepResearch機能を使えばWeb上で得られる一次情報の収集・要約はAIが代替するため、アナリストは**提示されたソースの信頼性チェックや不足情報の補完に注力する役割**へと変化しています^{⑥ ⑦}。一般企業においても、例えばマーケティング部門が行う市場リサーチや競合動向調査は、このAI自動リサーチにより大幅な時間短縮と網羅性向上が期待できます。

分析・仮説立案プロセス – AI導入「前」と「後」

- ・**Before (従来の分析)** : コンサルタントは、集めたデータをエクセルなどで分析し、経験則やフレームワークを基に仮説を立案していました。仮説構築にはチームでプレストを重ね、資料の矛盾をチェックし、必要に応じ追加調査を行うため、相当な時間と人的リソースを要しました。分析の深度や仮説の独自性は担当者のスキルに依存し、網羅性にも限界がありました。
- ・**After (AI活用後)** : 生成AI+RAGにより**データ分析と仮説生成が半自動化**されます。DeepResearchエージェントは関連する統計データや競合情報を自動取得し、「**AIによる論理推論 (Chain of Thought)**」で複数情報を統合した**高度な分析や因果関係の推定**まで実行します^⑧。例えば、財務データや市場動向をAIがまとめてリスクスコアを算出することも可能であり^⑨、分析結果の初稿が短時間で得られます。人間のコンサルタントは、AIが提示した分析結果を起点に「**なぜそれが起きて**

いるのか」「次に何が起こり得るか」を検討し、仮説を肉付けする作業に専念できるようになります¹⁰。つまりアナリストは検証者、コンサルタントは考察者としての比重が増し、人間はより創造的な洞察と戦略シナリオの構築に集中できます¹¹。この変化は一般企業の経営企画や商品開発の場面でも同様です。AIが市場データを分析してトレンドや課題を洗い出し、人間がその因果や戦略を考えるという協働により、より精緻で革新的な仮説立案が可能になります。

提案策定プロセス – AI導入「前」と「後」

- **Before（従来の提案策定）**：コンサルタントは、分析結果にもとづきソリューションを考え、フレームワークや過去の事例から示唆を得て提案を組み立てていました。提案書のアウトラインを作成し、チーム内レビューを経て修正し…というプロセスに時間を要し、提案内容も各人の知見や社内ナレッジに大きく依存していました。他業界のベストプラクティスや最新トレンドを取り入れるにも限界があり、提案に独自性や新規性を出すことが難しいケースもありました。
- **After（AI活用後）**：生成AIは大量の知識ベースや最新事例を参照してアイデア出しや戦略立案を支援します。ChatGPTに「〇〇市場で勝つ戦略案を5つ提案して」とプロンプトを投げれば、瞬時に多角的な戦略オプションの草案が得られます。またAIは業界や国境を超えた情報を学習しているため、**他業界・海外のベストプラクティスや最新トレンドを提案内容に積極的に盛り込むことができます**¹²。例えば、「他業界で成功した施策を自業界に転用する具体策を教えて」といった問いにもAIは即座に回答を生成でき、提案の独自性が向上します。こうして**提案策定の初期アウトラインやアイデアはAIが準備し、人間のコンサルタントはそこから有望な打ち手を選別・評価してクライアント固有の文脈に適合させる役割へとシフトします**¹¹。提案内容の妥当性検証や実行可能性の判断といった**人間の経験知を要する部分に注力**できるため、提案の実効性・具体性が高まります。一般企業でも、新規事業計画や社内プロジェクトの提案書作成において、AIが汎用アイデアや参考事例を提供し、担当者が自社向けにカスタマイズするという形で**より質の高い提案策定が実現**できます。

レポート・資料作成プロセス – AI導入「前」と「後」

- **Before（従来のレポート作成）**：コンサルタントやアナリストは、WordやPowerPointで報告書や提案資料を一から執筆していました。文章化や図表作成には細心の注意と多大な労力が必要で、情報の裏付けとなる出典を探して脚注を付けるなど、深夜残業もしばしば発生する工程でした。レポートの構成検討からドラフト作成、レビュー・修正を経て完成に至るまでに相当な時間がかかり、生産性向上のボトルネックになっていました。
- **After（AI活用後）**：生成AIがレポートのドラフトを自動生成し、人間が仕上げるスタイルに変わります。OpenAIの提供する「Deep Research」機能では、高度な推論を行うLLMとエージェント型RAG技術の組み合わせにより、AI自身が目的を再確認しながら**関連情報の検索→要約→構成化を繰り返し、一貫性の高い長文レポートを短時間でまとめ上げます**¹³。たとえば「競合5社の戦略比較レポート」を作成する場合、AIは自動で各社の公開情報を収集・比較し、数万字規模の詳細なレポートをわずか数十分で生成できます¹⁴。実際、OpenAIのDeepResearchは**人間のアナリストが見落としがちな視点も含め深い分析内容を提示した例が報告されており**（乳がん治療の見解提示など）、質の面でも専門家レベルに迫りつつあります¹⁵。このようにAIがドラフト作成を肩代わりすることで、人間は**文章のトーンや文脈の調整、誤情報のチェックなど最終レビューに専念**できます。特に**契約書の要点抽出やベンダー比較レポート**など定型的な文書作成業務はAIに任せれば短時間で済むため、人手で行えば膨大だった作業コストを劇的に削減できます¹⁶¹⁷。一般企業でも、社内報告書や議事録、ホワイトペーパーのドラフト生成にAIを使うことで**資料作成の時間を大幅短縮**し、内容検証や付加価値部分に人間が注力できるようになります。

プレゼンテーション準備 – AI導入「前」と「後」

- **Before（従来のプレゼン準備）**：コンサルタントは完成したレポートを基にPowerPointの提案スライドを作成し、プレゼンテーションのリハーサルを行っていました。スライド作成では構成案を考え、一枚一枚に要点を文章化し、適切なグラフや画像を探して配置する必要があり、多くの時間を要しま

した。デザイン面でも試行錯誤が必要で、「伝わる資料」に仕上げるには経験がものを言いました。Q&A想定問答の準備にもチームで時間を割き、プレゼン前夜まで微調整が続くことも珍しくありませんでした。

- **After (AI活用後) : 生成AIがプレゼン資料作成を強力にアシストします。** ChatGPTにプレゼンのテーマや対象聞き手を伝えるだけで、最適なスライド構成を自動生成させることが可能です¹⁸。例えば「新規事業計画の投資家向けプレゼン資料を作成したい。含める項目は課題提起、市場分析…」と指示すれば、AIが適切な全体構成と各スライドの要点例を出力してくれます¹⁸。従来は構成を考えて内容を埋める必要があったプロセスが**大幅に自動化・効率化**されるのです¹⁸。さらに生成AIはテキスト指示に応じて**プレゼン内容に合ったデザインやレイアウトのアイデアも提案**できます¹⁹。例えば「モダンで洗練された印象のデザインにしたい」と依頼すれば、おすすめのフォントや配色、レイアウト案が得られ¹⁹、デザインに悩む時間を短縮できます。図表作成においても、AIがデータから自動でグラフ化したり、必要な画像を生成（例：製品コンセプトのイメージ図）することも可能になりつつあります。完成したドラフトスライドに対し、人間は**細かなブラッシュアップや要点の強調、話すシナリオ調整**に専念できます。また、生成AIにプレゼン相手の視点で質問を投げてもらいQ&A練習をする、といった活用も考えられます。こうしたAIサポートにより、プレゼン準備にかかる時間は飛躍的に短縮しつつ、内容の練り込みや話し方の工夫など**本質的な部分に注力**できるようになります。一般企業の営業提案や社内発表でも同様に、AIが資料ドラフトやデザイン案を提示し、担当者が最終調整することで**迅速かつ質の高いプレゼン準備**が可能となります。

一般企業でも実践可能な導入ステップとポイント

コンサル業務での生成AI活用は、一般企業の様々な業務にもそのまま応用できます。以下に**再現性のある導入ステップ**をまとめます。

1. **課題の明確化とプロンプト設計:** 最初に、AIに何をさせたいかを明確に定義します。調査や分析のテーマ・目的を言語化し、必要な観点（例えば「市場規模」「競合動向」「最新トレンド」など）をリストアップしてプロンプトを作成します²⁰。この**プロンプト設計段階**で要求を具体化しておくことで、生成AIから得られるアウトプットの質が高まります。
2. **DeepResearch/RAGの実行:** ChatGPT等のツールでDeepResearch機能を起動し、プロンプトを投入します。必要に応じてAIから追加の確認質問が来ますので、それに回答して調査範囲を確定します²¹。社内の蓄積情報を活用したい場合は、自社ドキュメントをベクトルデータベースに入れて**RAGシステム**を構築し、AIが内部ナレッジを検索・参照できるようにします。例えば社内FAQや過去レポートをRAGで検索させれば、「**社内ナレッジ検索AI**」として運用でき、従業員からの質問に即座に正確な回答を提示できます²²。外部公開情報のリサーチにはDeepResearch、内部情報の活用にはRAGというように、目的に応じて使い分けます。
3. **AI生成レポートの受領と検証:** 数分～十数分ほど待つと、AIから詳細なレポートや分析結果が出力されます。まず**提示された情報源（URLや出典）のチェック**を行い、重要な項目については一次情報にあたってファクトチェックします⁶。AIは誤情報を混入させるリスクもゼロではないため、この**人間による検証プロセス**を組み込むことが重要です²³。検証の結果、明らかな誤りが見つかればプロンプトを修正して再度AIに問い合わせます。基本的な事実確認さえ済めば、得られたレポートはすぐにも社内外のビジネス議論に投入可能な状態になります⁶。
4. **洞察の深化と意思決定:** AIが収集・整理した情報を踏まえて、担当者は「**では何をすべきか**」「**次にどんな変化が来るか**」といったクリエイティブな思考に時間を使います¹⁰。仮説を立て直したりシナリオを検討したりする中で、必要に応じ再度AIに追加質問をして洞察を深めます。例えば「この原因をさらに詳しく説明して？」や「代替案は他にある？」といった対話を繰り返し、人間の洞察力とAIの網羅性を組み合わせて結論を導きます。最終的な戦略立案や意思決定は人間が行い、AIの提案を取捨選択して自社の文脈に合うアクションプランに落とし込みます。

以上のステップは、コンサルのプロジェクトのみならず**一般企業の企画立案や資料作成フローにもそのまま適用可能**です。ポイントは、AI任せにせず**人間が目的を設定し、結果を検証・補完**することです²³。こうし

た手順を踏めば、専門のコンサルタントでなくとも自社内で高度なリサーチ&分析が再現でき、業務革新につながります。

導入に必要な技術基盤・体制

AIを業務プロセスに組み込むには、以下の技術や社内体制の整備が重要です。

- ・**生成AIツール:** 高性能な大規模言語モデル（LLM）へのアクセスが必要です。具体的にはGPT-4クラスのモデルを利用できるサービス（ChatGPTやMicrosoft Copilotなど）や、企業向けに専門機能を備えたツール（PerplexityのDeepResearch機能等）を用意します。場合によっては自社データを学習させたローカルLLMの構築も検討します。
- ・**RAGによるデータ連携:** 社内のナレッジ（文書・データベース）をAIが活用できるよう、**Retrieval Augmented Generation**の仕組みを整備します。具体的には社内文書をベクトルデータベース化し、ユーザーのクエリに類似検索をかけて関連文書をAIに渡すパイプラインを構築します²²。これにより機密データを含む社内情報でも安全にAIが参照可能となり、汎用モデルの知識と組み合わせた回答精度向上が期待できます。
- ・**プロンプト設計のガイドライン:** 社員がAIを有効活用できるよう、効果的なプロンプトの作成方法や使いどころについて教育・ガイドライン整備を行います。例えば「5つの視点でアイデアを出させるには」「出力フォーマットを指定するには」等、業務で役立つ具体例を共有します（テンプレートプロンプトの社内ライブラリ化など）。これにより現場で再現性高くAIを使いこなせるようになります。
- ・**ガバナンス・セキュリティ対策:** 生成AI利用に伴う情報漏えいリスクや誤用を防ぐための体制も必要です。現状、調査では72%の日本企業が業務でのChatGPT利用を禁止しているとの報告もあります²⁴。これは外部AIに機密情報を入力することへの懸念からです。そのため、社内規程で扱って良い情報の範囲を定めたり、**オンプレミス環境で社内専用の生成AIサービスを導入**したりといった対策が求められます²⁴。具体例として、Azure OpenAIサービスで自社テナント内のみでAIに社内データアクセスさせる、といった方法があります。あわせて、AIが出力した内容の最終確認プロセス（人間によるレビュー）をワークフローに組み込み、誤情報やバイアス混入へのチェック体制も整備します²³。
- ・**導入・運用の専門チーム:** 社内にAI活用を推進・支援する専門チームや役割を設けると効果的です。例えばAIコーディネーターやプロンプトエンジニア的な人材を配置し、各部署へのトレーニングやプロンプト改善の支援、倫理面の監督を行います。また、小さくても**PoC（概念実証）プロジェクト**を立ち上げて効果測定し、成功事例を横展開することで社内のAI活用を加速させます。経営層のコミットメントも重要で、AI活用が会社戦略の一環であることを示し、現場が安心してトライできる文化を醸成します。

導入効果・メリットまとめ

生成AI（DeepResearch×RAG）の導入により得られる主な効果とメリットを整理します。

- ・**大幅な時間短縮:** 調査・資料作成に費やす時間が圧倒的に削減されます。従来は**数週間かかった市場調査や分析レポート作成が、AIにより数分～数十分で完了**するケースもあります^{3 14}。プレゼン資料作成も同様に、自動構成生成で工数が激減します¹⁸。これによりプロジェクト全体のリードタイムが短縮し、迅速な意思決定・提案が可能となります。
- ・**コスト効率の向上:** 人手や外部委託に頼っていたリサーチ作業の費用を劇的に削減できます¹⁷。同じアウトプットを得るのに以前は複数人×数週間必要だったものが、AIサブスクリプション費用のみで済むようなケースもあります（OpenAIのDeepResearchは月額200ドル程度で利用可能との報告²⁵）。限られたリソースでより多くの分析や提案を並行実施できる**スケール効率**も得られます。つまり、**少人数で多数の案件を回せるようになり、組織全体の処理能力が上がる**効果があります。
- ・**品質・網羅性の向上:** AIは人間が見落としがちな観点も含めて膨大な情報を統合できるため、アウトプットの**分析精度やインサイトの深さ**が向上します。例えば医療分野の検証では、AIが乳がん治療に

関して専門家が気づかない深い見解を提示した例もあります¹⁵。常に最新のデータにアクセスできるため時流に乗った提案が可能となり、また多言語情報を扱えることでグローバルな観点を含む網羅的な分析が実現します⁴。情報量と分析精度の両面で、人間のみでは困難だったレベルの品質向上が期待できます。

- ・**ナレッジ共有と属人性の低減:** AIが知識検索やレポート生成を担うことで、組織内の知見が形式知化・共有されやすくなります。過去プロジェクトの資料やベストプラクティスをRAGで蓄積・検索する仕組みは、**社員誰もが高速に必要情報へアクセスできる社内ナレッジプール**として機能します²⁶。その結果、「〇〇さんしか分からない」といった属人的な状況を減らし、組織知を有効活用できるようになります。
- ・**付加価値業務へのシフト:** 定型的な作業がAIで自動化されることで、社員は**より創造的・戦略的な業務に時間を振り向けられる**ようになります¹¹。調査や資料作成に追われていた時間を、新規アイデア発想や課題解決策の検討、クライアントや他部署とのコミュニケーションに充てられます。これにより業務の付加価値が高まり、社員のモチベーション向上やスキルアップ（より高度な分析スキルや意思決定力の習得）にもつながります。実際、AI活用の本質的なメリットは単なる効率化だけでなく、「**人間がより深く考えるための手段**」を確保することにあります²⁷。時間的・頭脳の余裕を得た人間が深い洞察を生み出し、精度の高い課題発見や現実的な意思決定を行えるようになる点こそ、大きな価値と言えるでしょう。

人材の役割変化と組織への影響

生成AIの導入は、人間の役割や組織構造にも変化をもたらします。「**AIにできること**」はAIに任せ、人間はより**高次の付加価値を担う**方向へシフトしていきます。

- ・**アナリスト（調査担当者）の役割:** 従来は情報収集やデータ整理に多くの時間を割いていた若手アナリストは、**AIが集めた結果の検証者・編集者**へと役割が変わります¹¹。具体的には、AIが出力したレポートの事実確認を行ったり、追加で必要なデータポイントを見極めてAIに追求させたりする役目です。また、AIではカバーできない**非公開情報の収集や関係者へのヒアリング**など、人間ならではの一次情報収集も引き続き重要な任務です²⁸。定型作業から解放されたことで、アナリスト自身もより創造的な分析や提案づくりに参加できるようになります。
- ・**コンサルタント（プロジェクトリーダー層）の役割:** ミドル〜シニアクラスのコンサルタントは、**戦略立案や洞察の応用により一層フォーカス**するようになります⁵。AIが基礎分析や提案ドラフトを用意してくれるため、コンサルタントはクライアント固有の課題に対する打ち手を考案したり、AI提案の中から最適解を判断したりといった**意思決定支援者・戦略アーキテクト**の色合いが強めます¹¹。対クライアントでは、AI生成の分析結果を踏まえつつ経営視点での解釈や提言を行う役割がより重要になります。要するに、「**知見を提供する人**」から「**知見をどう使うか提案する人**」へと価値発揮のポイントが移る形です。
- ・**新たに生まれる役割:** AI活用が進むと同時に、新しいポジションやスキル需要も生まれます。例えば、各種プロンプトを工夫してAIから最大限の成果を引き出す**プロンプトエンジニア/AIスペシャリスト**、AIの出力内容やデータ偏りをチェックする**ファクトチェッカー**、社内のAI活用を推進する**AIコンサルタント**などです。歴史的に見ても、自動車の普及で御者の仕事は減った一方で自動車整備士が生まれたように、AIによる業務自動化の一方で**人間には新たな役割が求められる**ようになります¹¹。また、AIには責任を取れないため、**最終的な説明責任や意思決定の責任は人間が負う**必要があります¹¹。このため、組織としても「AIの提案にゴーサインを出すのは誰か」「誤った判断があった場合に責任を負うのは誰か」を明確にし、権限と責任の分配を再設計することが求められます。
- ・**組織構造への影響:** AI活用により業務生産性が上がると、ピラミッド型の組織にも変化が起き得ます。例えば、これまで多数のジュニアスタッフが必要だった大規模調査プロジェクトも、少人数+AIで回せるなら人員構成を見直せます。その結果、**組織のスリム化やフラット化**が進む可能性があります。また、人材育成の面でも、従来は下積みとして行っていた単純作業が減るため、より早い段階から高度な思考業務に携わりスキルを磨く機会が増えるでしょう。逆に言えば、**AIを使いこなせる人材とAIに代替される人材**の差が出てくるため、社員はAIリテラシーを身につけて付加価値を発揮できるよう継

続学習が必要になります。組織全体で見ると、AIを前提とした新しい業務プロセスや役割分担に適応するためのチェンジマネジメントが重要になります。

おわりに: 一般企業への幅広い応用可能性

以上、コンサルティング業務を例に生成AI（DeepResearch×RAG）がもたらすプロセス変革を見てきました。これらの変化はコンサル業界に留まらず、あらゆる知的業務に普遍的に適用可能です²。事実、金融機関のリスク分析や医療分野の診断支援、製造業の市場調査など、各業界でRAGやDeepResearchを活用した事例が登場し始めています²⁹³⁰³¹。要は「大量の情報収集と分析」がボトルネックとなっている業務であれば、どの企業でも生成AIによる効率化・高付加価値化の恩恵を享受できるでしょう。

重要なのは、単に人間の仕事がAIに置き換わるという視点ではなく、人間とAIが協働してより高い価値を生み出す体制を築くことです。²⁷ 生成AIは強力な「考えるパートナー」となり得ます。一般企業においても、これを上手に取り入れれば業務プロセスそのものを再設計し、スピードと質の両面で飛躍的な改善が可能です。現場の知恵とAIの知識を掛け合わせ、これまでにない発想や迅速な実行力を備えた組織へと変革していきましょう。本レポートがその一助となれば幸いです。

References will be automatically included by the system.

¹ スゴすぎ…コンサル業界の「生成AI活用」最新図鑑、新しい“仕事内容・儲け方”大解説 連載：デジタル産業構造論 | ビジネス+IT

<https://www.sbbbit.jp/article/cont1/167102>

² ⁷ ⁸ ¹¹ ¹³ ¹⁴ ¹⁵ ¹⁶ ¹⁷ ²³ ²⁴ ²⁵ ²⁸ OpenAIの「Deep Research」は本当に人間の仕事を奪うのか? - GPT Master

<https://chatgpt-enterprise.jp/blog/openai-deep-research/>

³ ⁴ ⁵ ⁶ ¹⁰ ²⁰ ²¹ コンサル業界激震 DeepResearch最新活用術 | 経営者のための生成AI

https://note.com/ndot_man/n/nd21767274f52

⁹ ²² ²⁶ ²⁹ ³⁰ ³¹ AIリサーチ技術の最前線！RAG・RAR・DeepResearchを徹底比較

<https://arpable.com/artificial-intelligence/generative-ai/rag-rar-chatgpt-deep-research-comparison/>

¹² ²⁷ Deep Researchを使ってコンサルティング会社のレポートを超える方法をChatGPT 4.5に聞いてみた | 森 浩昭 / Hiroaki MORI

<https://note.com/threeplussix/n/na18aa46f3060>

¹⁸ ¹⁹ ChatGPTでスライド作成を自動化！効率的に高品質なプレゼン資料を作る方法 - 情報のカタチ

<https://jouhounokatachi.com/chatgpt-slide-creation/>